



高橋 長十郎 (銅像)

「なんと美しい絹糸でしよう。」

「このつややかな絹糸を使ったドレスを着てみたいわ。」

明治三十三(一九〇〇)年、ファッションの聖地であるパリに住む女性たちは、その絹糸を見て感嘆の声をあげました。絹糸の名前は「金華山」といいました。当時のパリは、エッフェル塔がシンボルタワーとして建造され、美しく着飾った貴婦人たちであふれかえっていました。そんな花の都パリで開催された世界中の物産を集めたパリ万国博覧会で、みごとグランプリと

いう世界一の称号を得た絹糸が志津川町(現在の南三陸町)で生産された生糸だったのです。生糸とは、蚕が作る繭から最初に取り出される絹糸のことをいいます。この糸は呼吸をしているので「生きてる糸(生糸)」と呼ばれ、高級な絹糸です。志津川町は、宮城県北に位置する小さな町です。この町で作った生糸が海を渡り、当時世界の中心としてさかえていたパリで世界一と認められたのです。栄光の第一報を受け取った人物の名は、高橋長十郎といっています。

長十郎は、嘉永二(一八四九)年に伊達藩志津川村(現在の南三陸町志津川)に生まれました。生家は呉服商を営む商家でした。長十郎が幼いころの志津川村は、養蚕や漁業で生計を立てる家が多く、天候に左右され、苦しい生活を送る人々が多くいました。大雨が降ったり、冷夏で



パリ万国博覧会グランプリ賞状
(「ひこころの里・シルク館」所蔵：南三陸町)

聖地：特定の分野において重要な場所。
感嘆：すばらしいと感心すること。

志津川町：明治二十八年十月三十一日町制で志津川町になった。平成十七年十月一日南三陸町となる。

養蚕：蚕から繭を育て糸をとる仕事。

生計：生活をしていくための方法。

呉服商：和服用の織物などを扱う商売。

あったり、日照りであったりすると、蚕のえさの桑の葉を手に入れることが難しくなり、蚕も病気で育ちませんでした。また、小舟で漁をする漁業も、悪天候の日は船を出すことができず、村の人々は、天候がおさまるのをじっと待つことしかできませんでした。たとえ天候がおだやかであっても養蚕の仕事も漁業も十分な収入を得られず、毎日の暮らしを支えることで精一杯でした。幼いころから店先を通る疲れ切った人々の顔を見て育った長十郎は、いつのころからか、村民の一人として村全体が豊かになることを願うようになり、

「この村を元気で活気のある村にしたい。そのためには、もっと新しい技術が必要だ。」と考えました。長十郎は、覚悟を決め、東京にある商法講習所(現在の一橋大学)に入学し、ふるさとのためになる新しい技術を学び取りたいと両親に願い出ました。この時代、地方から東京の学校に進学することは夢のような話でしたが、長十郎の強い思いは東京へと向かわせました。

長い間鎖国をしていた日本は、諸外国から工業技術の面で大きく遅れをとっていました。当時、明治維新を迎え、イギリスやフランスなどの先進国と肩を並べることができるよう殖産興業政策が取られていた時代で作った学校でした。その渋沢の話を知ることのできるめったにないチャンスです。長十郎は熱心に学びました。

あるとき、渋沢から指導を受ける機会が訪れました。「技術の向上や機械を取り入れた大量生産を目指すことが、殖産興業の目的ではない。」

長十郎は「新しい技術を学ぶことが町の繁栄につながる。」と考えていたのでとまどいました。

「では、何が目的のですか。」

「長十郎君。技術の向上で産業は発展し国は栄えるだろう。産業をおこした人も富を得るだろう。しかし、大事なことは、産業の発展を通して、そこに住むみんなが幸せになることだ。」



殖産興業政策：アメリカやヨーロッパの生産技術や制度を取り入れて工業を発展させる政策。

繁栄：さかになること。栄えること。

「住む人たちがみんなが幸せになること……。」

疲れ切った町民の顔を思い浮かべ、長十郎は渋沢の言葉を何度もつぶやきました。

「我が村の人々の幸せとは何だろう。」長十郎は故郷とつながる大空を見上げては考えを巡らすようになりました。帰郷する時、長十郎には、一つの考えがありました。それは、伊達藩の時代からの伝統産業である養蚕業の再興でした。より良質な絹糸を生産し志津川村の基幹産業に育てようと思ったのです。長十郎はその思いを実現するため、まず村に組合を作りました。それぞれの農家が紡いだ生糸を一手に預かり、組合がより光沢のある生糸に仕上げ直すことで、一定の品質を保った生糸を生産できるようになったため、志津川産の生糸の評判は高まっていきました。

長十郎は寝る間もおしんで次の策を考えました。「品質を落とさず、もつと大量に生産することはできないだろうか。たくさんの人たちが働くことのできる産業にすることはできないだろうか。」と考えぬいた末、長十郎は、村の人たちで最新のアメリカ製機械を購入し、工場を作することを提案しました。外国製の機械を使っている会社など日本中でもほとんどない時代です。それは小さな村の存亡をかける大きな冒険でした。

「機械はよく壊れるということじゃないか。アメリカ製の機械が壊れたらすぐに直せないだろう。」

「実際に使えるものかどうか分からないものを買うわけにはいかない。」

「第一、機械の値段が高すぎる。共同で買うなんてとんでもない。」

町の人たちは首を縦にふりません。機械を購入することへの不安や危ぶむ声でいっぱいでした。長十郎は、そうした声を最後までじっと聞き続け、そして一人一人に何度も粘り強く話しました。

「今、村を豊かにするために、この機械がどうしても必要なのです。私が一人で買っていいです。村の製糸業を盛んにすることが、村民みなを豊かにさせることになるのです。」



電気が灯る旭製糸株式会社
(「ひこころの里・シルク館」所蔵：南三陸町)

長十郎は、来る日も来る日も足を棒にして話をしに回りました。その姿を見た村の名士たちは、次第に心を動かされ、長十郎の話聞き入れてくれました。

明治二十一（一八八八）年、長十郎が三十九歳の時です。ついに大規模な機械を装備した旭製糸株式会社が設立されました。日本初の機械式座繰り製糸工場の誕生です。ですが、工場ができたばかりのころは、思うような製品ができず苦難の毎日でした。長十郎はあきらめることなく、品質の向上を目指し、工場の人々など力を合わせ技術の改良を進めました。

そうした苦心の末にできあがった製品が「金華山」という世界最高峰の絹糸だったのです。

「おらほの町の生糸が世界一になった。」

「世界一の製品は、私らが作っているんだ。」

「がんばってきて、本当によかったなあ。」

小さな町は、世界的な栄誉の知らせに歓喜の渦に包まれ、みんなの笑い声が響き渡りました。華やいた人々の顔を見た時、長十郎のほおを一筋の涙が伝い落ちました。

やがて工場は四百五十人ものが働く大会社に成長し、製糸業では全国でもトップクラスとなりました。長十郎は、会社で得た富を、これからの若者を育てる中学校や高等学校を作るために使いました。

「みんなが幸せになること。」長十郎の心にはいつもこの言葉があったのです。

高橋 長十郎

高橋 長十郎は、嘉永二（一八四九）年、伊達藩志津川村（現在の南三陸町）に生まれた。養蚕の盛んな志津川に日本初のアメリカ式機械を導入した旭製糸株式会社を創立。生産した生糸は、パリ万国博覧会に出品され、グランプリを得る。後にこのような功績により奥州生糸の産地で「製糸業発展の父」と称されるようになる。町の人々は長十郎の銅像を建て偉業をたたえた。東日本大震災で長十郎の銅像は津波で流出したが、その後奇跡的にも発見され、これからの町の復興を見守るため、新公園に移設される予定である。

帰郷…
故郷に帰ること。

再興…
再びさかんにすること。

基幹産業…
中心となる産業。

光沢…
物の面のつややかさ。つや。

存亡…
長く続くか、ほろび去るかということ。

名士…
世間に知られている人。

旭製糸株式会社…
創設者は、高橋長十郎、佐藤久作、和泉秀次郎ら地元の名士たち。

座繰り…
繭から糸を集めて一本の生糸にして糸わくに巻き取る器具。